営農インフォメーション

水稲

～適正な管理で健苗育成を～

育苗管理で最も注意が必要なのは育苗初期（1.5葉期）です。いもち病やばか苗病などの病害対策を徹底し、適正な温度や水管理に努めてください。

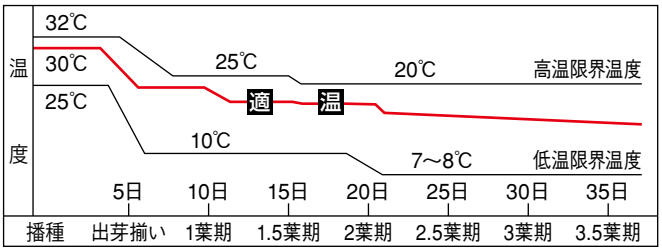
☆播種量別育苗日数の目安

播種量（乾籾）	100g ／ 箱	140g ／ 箱	180g ／ 箱
育苗日数	35～40日	25～30日	20～25日
移植時葉数	3.5～4.0葉	2.5～3.0葉	2.0～2.5葉
移植時草丈	13～15 cm	12～14 cm	10～13 cm
10a当たり種子量	4.0 kg	4.2 kg	4.5 kg
10a当たり箱数	40箱	30箱	25箱

☆温度管理

適温管理に心がけ、徒長苗にならないよう注意してください。また日差しの強い日は早めにハウスを開け、風の強弱や外気温の高低で開け方を調整し、高温は避けましょう。

温度管理表（無加温）



☆水管理

水かけは出芽揃い後、覆土の持ち上がりを落とす程度の灌水とし、かけすぎには注意してください。灌水は朝または午前中に充分行い、1回の灌水量を多くして、回数をできるだけ少なくしてください。

☆追肥

ロング肥料を使用している場合、追肥は不要であるが、使用していない場合は、中苗で2葉期と3葉期に、稚苗で1.5葉期にそれぞれ窒素成分で1g追肥してください。

☆圃場管理

深耕は、地水温を高めるためにも大切な作業である。ロータリーの爪が摩耗してくると、目標耕深15cmが確保しにくくなるので、よく点検してください。

ねぎ

定植時の管理～夏ねぎ～

①定植適期について

定植苗の姿[草丈：17～20cm、太さ：3～4mm、葉数：2.0～2.5葉]・伸びすぎた苗の剪葉方法

伸びすぎた葉を15～17cmの長さにカットする。

（本葉1.5葉期に1回目、定植5日前（本葉2.5葉期）に2回目の剪葉を行う。）

注１）剪葉は、完全展開している葉を切り、伸長中の新葉は切らないこと。

注２）剪葉した葉は、育苗箱の中に残らないようしてください。

☆早出しをねらうなら！

定植後、パスライトのベタ張りで保温して生育促進させると、収穫時期が1週間程度早まります。

②定植時の病害虫対策

タマネギバエ タネバエ	定植前日にスタークル顆粒水溶剤※50倍液を0.5ℓ/箱、かん注する。前年、発生の見られた圃場に作付する場合。
ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	定植後にオンコル粒剤5またはガゼット粒剤を3～6kg／10a散布する。スタークルの灌注処理を行った場合は、定植時の防除を省略できる。
ネキリムシ	定植直後にネキリムシの発生が多くみられる圃場では、定植時にカルホス微粒剤Fを6kg／10a土壌混和する。
小菌核腐敗病	定植直前にトップジンM水和剤250倍液を1ℓ／箱かん注する。
タマネギバエと小菌核腐敗病の同時防除	定植直前にトップジンM（水）と、スタークル（顆粒水）※による混合かん注処理する。この場合、定植時及び6月の殺虫剤散布を省略できる。薬剤処理方法の詳細については、定期発行の「ねぎ情報」にてお知らせします。

※スタークルはアルバリンに代替できます（成分・使用基準同じ）。タマネギバエ、タネバエはアザミウマ類及びネギハモグリバエと同時防除する。

③除草対策

・定植時、畦に雑草が発生する前に散布する。

ゴーゴーサン細粒剤F	4～6kg／10a　定植後（雑草発生前）但し定植10日後まで全面土壌散布
コンボラル	4～6kg／10a　定植直後（雑草発生始期まで）全面土壌散布
クレマートU粒剤	4～6kg／10a　定植活着後（雑草発生前）但し定植10日後まで全面土壌散布

注）土壌水分がないと効果が低いので、降雨後の散布がおすすめ。砂丘地では薬害に注意。